



Title	WHOラオス事務所インターン報告
Author(s)	時枝, 夏子
Citation	目で見るWHO. 2018, 67, p. 40-41
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86607
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

WHO ラオス事務所インターン報告

米国エモリー大学 Rollins School of Public Health 時枝 夏子



2017年8月– MPH Candidate 2019,
Rollins School of Public Health,
Emory University

1. はじめに

本報告は、2018年5月から8月までの3ヶ月間、ラオス人民民主共和国（以下、ラオス）の非感染性疾患対策（Noncommunicable Diseases）の現状を学ぶために行ったインターンシップの経験を記したものである。私は現在、米国エモリー大学の Rollins School of Public Health に在籍している。本インターンは本学が卒業要件としている 200 時間の現地実習として、ラオスの WHO 事務所で行ったものである。

2. 背景

ラオスの概要

ラオスは、WHO Western Pacific Region に所属する。人口は約 676 万人¹で敬虔な仏教徒が多く住む、自然豊かな国である。

非感染性疾患の動向

世界の疾病構造は大きく変化し、現在は非感染性疾患による死者数が全体の約 70%を占めるようになった²。とりわけ心血管系の疾患による死亡率の高さが問題となっている。今回私がインターンを行ったラオスも同様に、死因の約 55%を非感染性疾患が占めており、その中でも心疾患の割合が最大となっている³。

WHO-PEN ガイドラインについて

WHO-PEN は WHO Package of Essential Noncommunicable Disease Interventions for primary healthcare in low-resource settings の略称である。これは、心疾患、慢性呼吸器疾患、癌、糖尿病の4大疾患に対して、プライマリーヘルケアで必須となる介入のプロトコルを WHO が定めたものである。2015年にラオスでも Lao-PEN として導入され、パイロット事業が行われた。その後、他2県に事業拡大を図っているが、全国的な広がりにはみせていない。

3. インターンシップの内容と成果

私は、パイロットプロジェクトが行われた県にある3つの病院で、Lao-PEN のガイドラインに沿った心疾患に対するサービス提供の現状を明らかにするために、調査の準備から実施までを行なった。調査の質問項目は、医療施設で提供されているサービスの内容だけでなく、サービス提供に関わる要素についても包括的に情報が得られるように、ラオスの保健省が提示している Health Sector Reform の5つの柱

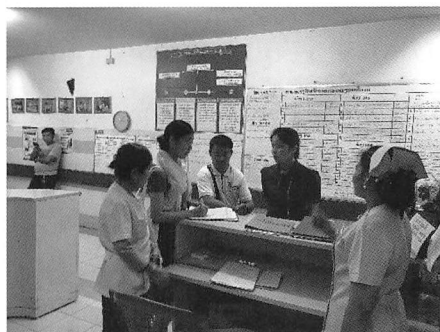
（Health Financing・Human Resources for Health・Governance, Organization and Management・Health Service Delivery and Hospital management・Health Information System）に沿って質問項目を設定した。

調査は、保健省の非感染性疾患担当者、県病院の医師、WHO ラオス事務所のスタッフと調査チームを組み、5日間の日程で県病院、郡病院、ヘルスセンター各1施設ずつで行った。その後、調査結果は記述分析を行った。本調査では多くのデータが得られたが、主要な結果は、全ての施設において Lao-PEN に規定されているプロトコルの実践が積極的に行われていなかったことである。このような状況にあった主な理由については主に以下2点の問題が考えられた。

1 点目は、WHO-PEN は使用時に各国の状況や文化的な文脈に沿って、その国にあった内容に改訂して用いられることが期待されるが、それが十分に行われずに各医療施設に導入されたことである。ラオスの医療の現状を鑑みて、どのプロトコルが重点課題となり、現在行われている実践にどの様にプロトコルを組み込んでいくかといった具体的な戦略が不十分であった。

2 点目は、モニタリングと評価を含む中長期的な計画の策定が十分になされていなかったことである。これにより、プロジェクト運営にかかる資金の確保やスタッフ教育が計画的に行われず継続が困難になっていた。具体的には、3施設全てにおいてスタッフの継続教育が不十分であっ

たため、パイロット事業で支給された簡易式血糖測定器が全く使用されていなかったり、常備薬の在庫管理が徹底されていなかったりした。この様に、今後は上記 2 点の課題解決を中心に Lao-PEN の効果的な運用に向けた更なる取り組みが必要であることを本調査で示唆することが出来た。



県病院での調査の様子

4. インターンシップで得た学び

今回、調査計画から実施、報告書作成までの一連の活動に携わることができ、大学院で学んだ公衆衛生に関する知識をどのように現場で形にしていけるかを体験的に学ぶことができた。調査計画から調査票の作成においては、スーパーバイザーの方々にご指導をいただき、サービス提供の状況をアセスメントする際、医療現場の状況だけでなく、サービス提供に関わる人的資源や政府の予算編成、また医療統計システムの状況等を組み込むことの必要性について考えることが出来た。その結果、本調査において Lao-PEN を継続可能なプログラムに再編成していく上で必要となるデータを収集することができた。

また、実際の調査では、同行するスタッフと調査目的とその内容について十分に情報を共有して臨むことの重要性を実感した。現地での調査の際に、答えにくい質問についてはその場で補足の説明を追加していったのだが、質問とその意図の共通理解が不十分であったことに加え英語とラオ



ヘルスセンターのスタッフと簡易式血糖測定器の使用方法を確認している様子

語でのやり取りが必要であったため、この作業に時間を要してしまい、現地での限られた時間を有効に活用することが出来なかった。

また、本報告では、調査結果について大きく 2 点の課題について述べたが、その他にもラオスの医療スタッフが持つ強みや、日常生活に根付く薬草療法など、ラオスが持つ豊かな資源についても学ぶことができた。そういった良さをどのように強化していくかという側面についても考えを深めることが出来た。

5. 終わりに

本インターンを通して、WHO の国事務所がどのような役割を担い、その国の政府や他機関と連携しながら保健プロジェクトの運営に取り組んでいるのかについて学ぶことができた。今回の経験を基に、今後は研究で得られたエビデンスをどのように現場のプロジェクト立案・運営に活用していくかについて更に学びを深めるため、残りの大学院生活を過ごしていきたい。

最後にご支援くださった日本 WHO 協会、本インターンを受け入れてくださった WHO ラオス事務所、ご指導くださったスーパーバイザーの皆様、また保健省や調査地で出会った全ての関係各位の方々に、心より御礼申し上げます。貴重な学びの機会を与えてくださり、誠にありがとうございました。



WHO ラオス事務所のスタッフの方々と

参考文献

1. World Health Organization (WHO). Country Profile. Retrieved from: <http://www.who.int/countries/lao/en/>
2. World Health Organization (WHO). Global Health Observatory data. Retrieved from: http://www.who.int/gho/ncd/mortality_morbidity/en/
3. WHO. (2017). Noncommunicable Diseases Progress Monitor 2017. Retrieved from: <http://apps.who.int/iris/bitstream/handle/10665/258940/9789241513029-eng.pdf;jsessionid=6F531D9EE0A194856F4A737C7E19C038?sequence=1>